

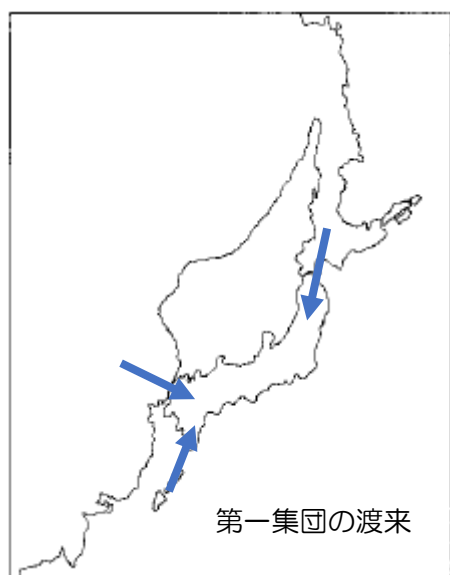
Ⅲ 日本人の起源 石器時代～江戸時代

新石器時代の開始の時期を「土器の出現で考えるか、あるいは石器の種類の変化で考えるのか」によつて、微妙な問題が残ります。

たとえば、新石器時代の開始時期である草創期を土器の出現によって定義すると、北海道や琉球諸島ではほとんど土器がみられないので、北海道や琉球諸島は新石器時代に達していないことになります。

東日本型隆起線文土器や西日本型隆起線文土器地域においてみられる石器は新石器時代のものであり、狩猟に伴って移動生活をしてきた旧石器時代の石器とは違うものです。しかし九州北部では、依然として後期旧石器時代以来の細石刃石器が使用されていましたが、その一方で、九州南部では貝文土器が使用されていました。

このように地域によって土器と石器との時代区分の食い違いがあり、地域的差異が大きいだけでなく、新石器時代への移行の時期も地域によって異なることが分かります。



1万2000年ほど前までは氷河期であり、現在浅い海となっている部分は、当時は陸地だったため、ユーラシア大陸の様々な地域から日本に渡来しました。

これはDNA多型分析の結果からも判明しています。まず旧石器時代にシベリアから流入したC3系統、O系統の集団が先行する種々の文化をもたらした後に、新石器時代に朝鮮半島経由で九州へ流入したと思われるD2系統の集団が縄文文化の形成に大きく寄与したと推定されます。さらに新石器時代には、琉球諸島を経て南九州へ流入するルートによってCI系統の集団が貝文文化をもたらしたことが推定され、新石器時代における多様な文化の形成に役立ちました。琉球諸島ではこの時代に渡来したと思われる人骨が各所から発掘されています。

先般、島伝いに南方から日本に来たことを証明するために、男女5人が丸木舟に乗って、台湾から与那国島へ渡る実験が行われました。黒曜石の石器を使って丸木舟を製作し、36時間の航海で到達できることが証明されました。

縄文土器の出現らよって、日本列島の新石器時代を縄文時代と定義していますが、隆起線文土器に先行する土器として無文土器も確認されています。このように新石器時代の始まりの時期には多様な土器の様式があり、その背後には多様な文化圏が想定されます。また新石器時代の土器の制作は日本列島の周辺地域で始まった可能性があり、周辺地域の土器文化との多様な文化的接触や多種類のヒト集団が日本列島へ移動したものと考えられます。



黒曜石石器



縄文式土器

縄文時代における最大の特徴は、縄目の模様をついた縄文式土器です。世界的には、臀部を誇張した女性像が多いのに反して、宇宙人にも似た遮光器土偶は、日本独特のものです。

縄文時代の最も有名な遺跡は、青森県の三内丸山遺跡であり、約千軒以上の集落があり、復元作業によって、高さ約15メートルの木製の櫓が立っていたと推測されます。直径2メートル、深さ2メートルの柱の穴が、4.2メートル間隔で六つ発見されました。その柱の穴から推定すると、5階建ての家屋に相当します。

2千点の土偶、1万点以上の土器、その他にも高度な技術で作られたさまざまな木製品、貝の装飾品、動物の骨や角でつくった釣り針、ヒスイの加工品などが出土しています。

極東の島国に、エジプト文明やメソポタミア文明、インダス文明や、黄河文明に匹敵する、固有の古い文明があったのです。

約6千年前の縄文時代末期には、岡山・寝鼻貝塚からは佐賀県において稲作や野菜の栽培や家畜の飼育が行われていた痕跡が残っていますし、この頃に作られたと思われる鉄器や青銅器が数多く出土しています。



富士山の火山活動によって火山灰が堆積して関東ローム層ができました。3万3千年前には黒曜石が採掘された関東ローム層の群馬・岩宿遺跡があり、日本独自の文化として、世界最古の磨製石器が発見されています。従って、日本列島に最初の人類が渡来したのは、これ以前のことだと推測されます。

長野県野尻湖遺跡の約4万年前の地層からナウマン象の化石が発見されています。

1万6千年前には、世界最古の縄文遺跡と言われる青森・大平山元遺跡があり、土器、弓矢、研磨石器が出土しています。当時の日本列島の人口は約80万人と推計されています。

1万2千年前、最終氷期が終了し、急激な温暖化による海面上昇が始まって、日本列島が現在の形になりました。



三内丸山遺跡塔舎復元図

約4400年前-約3000年前(縄文時代の後期と晩期)に第二の集団が渡来しました。朝鮮半島、遼東半島、山東半島にかこまれた沿岸域およびその周辺の漁労を主とした採集狩猟民や園耕民だと思われます。日本列島の中央部の南部において、第一波渡来民の子孫と混血しながら、すこしずつ人口が増えていきました。

3000年前に弥生時代が始まりました。

O2b集団に属する稲作技術を持った第三の集団（弥生人）が、長江付近をルートとするジャポニカ米と共に、中国から渡来しました。一時期に多量の渡来ではなかったため、既存していた縄文人の社会の中で徐々に同化していきました。弥生人の平均寿命は、縄文人の平均寿命15～20年に比べて30年まで、徐々に人口が増加して、弥生時代中期に於ける縄文人の割合は10～20%だと言われています。なお渡来した弥生人の大多数は男性であり、結婚相手は先住民族である縄文人女性であったことも、DNA解析で分かっています。



弥生式土器

約3000年前に九州地方で稲作が始まり、紀元前4世紀には東北地方まで広がります。

稲作には共同作業が必要なので、集落ができました。食料を保存するための高床敷の倉庫、日用道具として弥生式土器が使われました。祭祀用品として銅剣、銅鐸などが作られました。

弥生時代の代表的な遺跡として、奈良・唐古遺跡、静岡・登呂遺跡、坂・吉野ヶ里遺跡があり、島根・神庭荒神谷遺跡からは銅剣、銅鐸、銅鉾が出土されました。

弥生式晩期になると、国内の戦乱が激しくなって、刀傷がついた遺骨と共に、鉄や銅製の武器が多数発見され

ています。このような傾向は関東では全く見られず、九州と中国、近畿に偏っています。

これは、大和朝廷が九州から近畿に東征して、3世紀から7世紀にかけての古墳時代に統一国家を完成した時期と一致します。

古墳時代以降、第四の集団がユーラシア大陸から朝鮮半島を経由して渡来しました。政治の中心が九州北部から現在の近畿地方に移ると共に、急速に人口を増やしていきました。

それまで東北地方に居住していた第一集団の子孫は、古墳時代に大部分が北海道に移っていき、その代わりに、第二の集団が東北地方に住みました。九州南部には、第二の集団のDNAを持った人の集団が多数移住して、江戸時代以降には第三の集団の人々も加わって、現在の沖縄人が形成されました。

古墳時代から平安時代にかけて、北海道の北部に渡来したオホーツク文化人と第一の集団の子孫の間の交配によって、アイヌ人が形成されました。江戸時代以降は、アイヌ人と日本本土の人との交配が進んで、急速に人口が増えていきました。